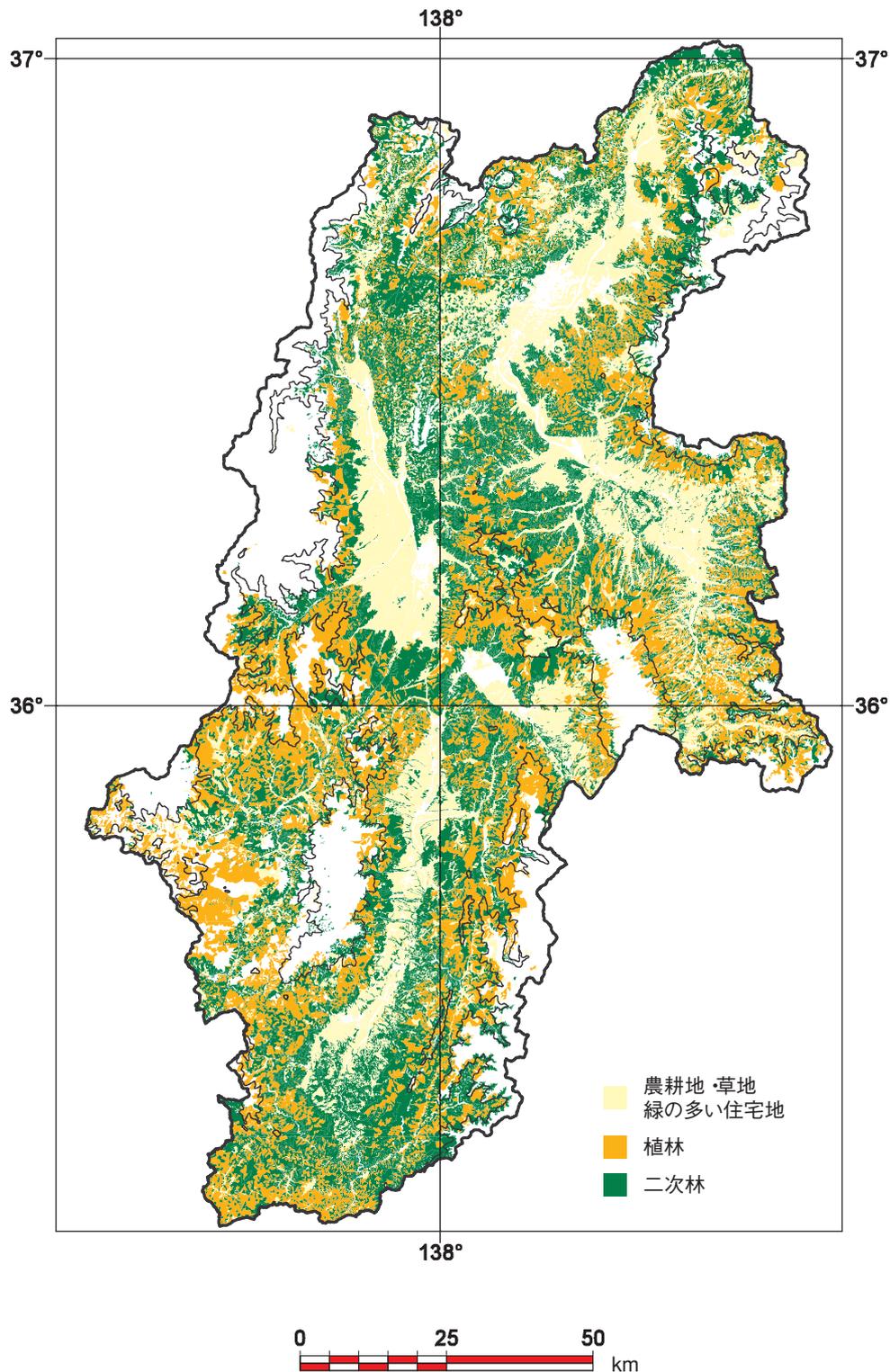




〔口絵1〕 信州の里山景観（小川村）

上水内郡小川村にみられる北部フォッサマグナ地域における典型的な里山景観。山間地に立地する里山の背後に奥山である日本アルプスを望む。



〔口絵2〕 植生自然度を用いて抽出した長野県における里山分布（着色部分が里山に相当）

本研究の里山の定義にならい、植生自然度の2, 3, 4（農耕地・草地・緑の多い住宅地）、6（植林地）および7, 8（二次林）を里山として抽出した。着色の地域が里山に相当する。細実線は標高1,500mの等高線を示す。（この図は、第2版 自然環境GIS（環境庁1999）に収められた第3回自然環境保全基礎調査に基づく現存植生図データを用いて作図した。）

（編集作図：浜田 崇・尾関雅章）

信州の里山の原風景(1)～(4) [口絵 3～6]

かつての信州の里山はどのような様子だったのか、里山の原風景の復元を試みた。代表的な風景として(1)中条村、(2)木曾町(旧開田村)、(3)下諏訪町、(4)安曇野市(旧豊科町)の4箇所を取り上げた。復元箇所の選定にあたっては、「過去と現在との違いがわかりやすいこと」、「過去の風景についての記憶があり、それを教えてくださる方がいること」、「信州の里山としての典型性がみられること」などを考慮した。原風景の時期としては、現時点で記憶をたどることができる限界に近い昭和初期を目安とした。口絵上段は現況写真で、下段に聞き取り調査をもとにして描いたかつての風景を示した。作画にあたっては、基本的に聞き取り内容を参考にしたほか、本報告書Ⅱ章10「語りからみた戦前の信州の里山の暮らし」の調査記録や、当時の様子に近いと思われる写真資料なども参考にした。

なお、復元図は調査者自身は実際には見たことのない風景を想像しながら描いたもので、原風景のイメージの再現を目標としたものである。当時の家並や樹木の位置など、細部の考証については不正確な点があることをお断りしておく。

里山については、個々の体験や映画などのメディア情報により、人それぞれに自分なりの里山イメージをもっていることが多い。そのため言葉だけでは、お互いの里山イメージの共有がむずかしい。また、里山そのものが時代とともに変化を繰り返してきたものであるため、理想の里山は一つではないし、里山保全の目標もひとつに限定してしまう必要はないと考える。さまざまな里山イメージをもちより、これからの里山がどうあればいいのかを柔軟に考えてゆくうえでは、かつてどのような里山があり、この数十年の間に、実際の里山がどう変貌してきたのかについて、言葉に加えて視覚的なイメージを提供することは意味があると考えた。あくまでも試作的な復元図であるが、かつての里山の多様性と近年の変化についての理解の一助になれば幸いである。なお、調査にご協力をいただいた四名の方々に、この場をかりて感謝の意を表します。(調査：富樫 均・浦山佳恵)



〔口絵 3〕 (1)中条村の現況と原風景

中条村は、長野市の西に位置し、過疎化の進行が著しい中山間地域の農村である。この地域の土地利用や暮らしの変化については、報告書Ⅱ章8「長野県の里山における土地利用変化とその要因」ならびに9「暮らしからみた昭和20年代の資源利用とその変化－中条村を事例に－」にまとめられている。原風景の特徴としては、現在荒地や樹林地になっている場所の多くが、かつては耕作地であり、傾斜地のなかに見渡す限り畑や水田が広がっていたという点である。

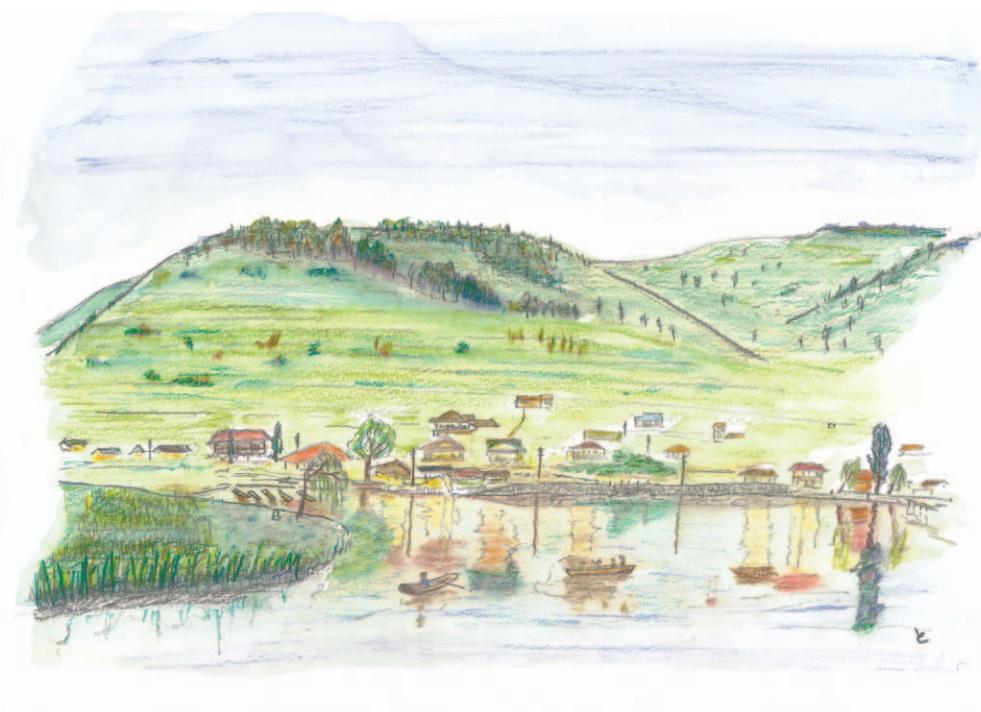
(調査協力者：新井 均さん，撮影場所：中条村大字御山里追平，作画：富樫 均)



[口絵 4] (2)木曾町 (旧開田村) の現況と原風景

開田村は御岳火山の東に位置し、かつて馬産が盛んな地域であった。春と秋には家で飼っている馬を集落の周辺に放牧し、放牧した馬を連れ戻すのは子どもの仕事であったとのことである。原風景で特徴的なのは、馬が田畑に入り込まないように道と畑の境に馬柵がめぐらされていたことや、桑畑や草地在周辺に広く存在していたということである。

(調査協力者：山下吉右エ門さん，撮影場所：旧開田村西野安又，作画：富樫 均)



[口絵 5] (3)下諏訪町の現況と原風景

下諏訪町は諏訪湖の北に位置しており、諏訪湖は日常の暮らしとも関わりが深い。戦後になって、諏訪湖の湖畔では埋め立て事業が進み、湖岸線が大きく変わるとともに、湖畔の風景も一変した。写真は高浜湾に面する湖岸近くのものであるが、現在は道路沿いに店舗が並び、かつての湖畔とは様変わりの状況である。また背後の山の上部には昔からアカマツやスギの林があったが、低木や草本が優占する開けた場所も多かった。原風景と現在との変化がもっとも顕著な例である。

(調査協力者：金子敬二さん、撮影場所：下諏訪町富部湖水端、作画：富樫 均)



[口絵 6] (4)安曇野市 (旧豊科町) の現況と原風景

豊科町は安曇野中央やや東寄り，烏川扇状地の扇端部に位置し，湧水に恵まれた低平地にある．現在では圃場整備がすすんだ広々とした水田に用水路が通っているが，かつては，いたるところにケミと呼ばれる湧水地があり，ヤナギなどの樹木がうっそうと茂るケミ林が多かったとのことである．万水川（よろずいがわ）支流の帯広川（おびひろがわ）は，現在よりも幅が広く（幅7～8m），水がきれいで水草が多く，子どもたちの遊び場でもあった．冷たい川に入って遊んだあとは，桑畑に腹這いになって温まったという．

（調査協力者：飯沼冬彦さん，撮影場所：旧豊科町大字南穂高細萱万水，作画：富樫 均）